

第7回香川県希少糖戦略会議議事録

1 会長挨拶

2 議事

(1) 希少糖戦略会議 各部会からの取組みについての報告 (資料 1-1、1-2、1-3)

○生産・健康・医療部会

- ・4カ月に1回のペースで3回開催した。香川県の希少糖関連施策では、糖質バイオ商品開発支援や希少糖生産に係る研究開発支援について討議された。また、かがわ糖質バイオフォーラム第11回シンポジウムの企画等について検討した。
- ・希少糖の日(11月10日)に県内で「かがわ菓子まつり」と「希少糖ハイボールBAR」、県外ではサンテレビと共同で神戸 umie でイベントが開催された。
- ・アルロース、レアシュガースウィート(RSS)に関するブルネイ、タイ、アメリカなど海外との共同研究についても議論を交わした。
- ・フーデックスジャパンやスーパーマーケットトレードショーなどの展示会出展や国内の学会・講演会等を活発に行っている。フーデックスジャパンはNHKのウェブニュースで取り上げられた。
- ・RSSの生産販売については、昨年同様、韓国、台湾、香港、シンガポールで海外展開がなされている。アルロースに関しては、イングレディオンと共同でメキシコに製造工場を建設中であることを松谷化学工業が発表した。今年秋から製造を開始し、2020年から「アストレア」の商品名で販売を開始すること。糖質やカロリー摂取を控えたい消費者ニーズに応える飲料・菓子・乳製品等の製品開発に貢献できるようになる。本年4月17日には米国食品医薬品局(FDA)がアルロースを糖類、添加糖類から除く方針を発表した。

○食品産業部会

- ・希少糖の日に向けての取組みについて議論した。
- ・香川県産業技術センターの三好技師から「食品に含まれる希少糖類の分析-コロナ荷電粒子検出器を用いた希少糖類分析方法の検討-」の研究報告があった。加工食品に含まれている希少糖の検出について良い結果が得られたとの報告があった。
- ・県から糖質バイオフォーラムの案内、希少糖普及協会からRSS商品リストの活用についての報告を行った。

○農水産業部会

- ・希少糖を農薬に使う研究や共同連携が着実に進んでいる。詳細は許認可等の関係から省略するが、様々な案件が進んでいる。
- ・ズイナに関する研究については、ふるさと名品オブ・ザ・イヤーの政策奨励賞受賞後、ズイナだけがD-ブシコース、アリトールを作ることに着目し、実用化に向けて香川大学を中心に基礎・応用研究が進展している。大学と県農業試験場との連携では、ズイナに含まれる希少糖をお茶として使用する抽出法の検討や成分分析を行っている。
- ・畜産分野では、松谷化学工業・希少糖生産技研・県畜産試験場・香川大学の連携が続いてい

る。ズイナを畜産に応用できないかということから始まり、RSS を使った研究に移行し、今後は、D-プシコース（アルロース）の純品が製造販売されれば畜産分野での使用が可能になるため、それらに関する基礎・応用研究が進んでいる。家畜の場合、安全性の確認等に時間がかかるが、県畜産試験場で順序立てて研究をし、芽が見え始めたところ。許認可等があるため、石橋を叩くように進めるため時間がかかるが、関係者でタイトな連携関係を築き、研究を継続している。

○複合糖質・糖鎖部会

- ・9月10日には、植物の有効成分と免疫系の関連の研究で著名な筑波大学 生命環境系／地中海・北アフリカ研究センター教授の磯田博子先生をお招きし、御講演いただいた。部会に合わせて県内企業とのマッチングの場をもち、後に交流を始めた。
- ・本年2月22日には、岡山大学医歯薬学総合研究科 腎・免疫・内分泌代謝内科学教授の和田淳先生に御講演いただいた。昨年度、岡山大学がレクチンマイクロアレイを利用した尿中のわずかな糖たんぱく質の糖鎖プロファイリングにより糖尿病腎症の予後判定が鋭敏にできることをプレスリリースし、学会だけでなく企業からも注目されている。
- ・本年5月17日には、抗体医薬の分析・品質評価の世界的権威である東京大学大学院工学系研究科教授で医科学研究所も兼務している津本浩平先生に御講演いただき、県内企業とのマッチングでは、今後の事業化に後押しをいただいた。
- ・日本糖鎖科学コンソーシアム（JCGG）「未来を創るグライコサイエンスー我が国のロードマップ」で糖鎖に関する150項目の話題に専門家の意見を掲載した。また、これから開催されるイベントの御案内を資料としているので参加の御検討をいただきたい。

（2）県の平成30年度事業報告及び令和元年度事業の取組み（資料2）

【産業政策課長】

平成31年度事業報告について。従来から「1 知の拠点の形成」、「2 希少糖産業の創出」、「3 香川の希少糖ブランドの確立」の3本柱で取り組んでいる。このうち、「1 知の拠点の形成」については、希少糖拠点機能強化事業として、県産業技術センターにおいて、香川大学などと連携して希少糖をより効率的に生産するための研究等に取り組む、希少糖研究拠点としての強化を図った。また、希少糖研究開発加速化支援事業では、香川大学の希少糖研究15テーマを支援した。

「2 希少糖産業の創出」では、糖質バイオ商品開発支援事業で、新たな希少糖生産に関する事業に参画しようとする県内企業1社、希少糖を使用した商品開発や糖質バイオ分野の事業化に取り組む企業2社に対し、補助を行った。また、希少糖製造技術者養成支援事業では、県内製造業の技術者に対して、希少糖の生産技術を学ぶプログラムを実施するとともに、ネットワーク形成事業で、希少糖戦略会議やかがわ糖質バイオフォーラムを開催した。

「3 香川の希少糖ブランドの確立」では、「希少糖＝香川県」のイメージを発信し、県内外に浸透させることを目標に、希少糖ブランド化推進事業で、国際食品見本市フーデックスに出展した県内企業13社の販路拡大支援やさぬきうまいもん祭りや小中学校向け出前講座

など県内外でのPRを行った。

続いて、令和元年度事業については、希少糖関連プロジェクト事業では、「知の拠点」の形成、「希少糖産業」の創出、「香川の希少糖ブランド」の確立を柱に、関係機関の皆様と十分な連携を図りながら先に御説明した各種事業に引き続き取り組むこととしているので、希少糖産業の成長に向け、委員の皆様方の御協力をお願いしたい。

【会長】

希少糖製造技術者養成支援事業 19 社 22 名参加うち 7 社が実習に参加したとあるが、参加者は主に食品企業で希少糖に関心のある方が多いのか又は希少糖を作ろうという方が参加しているのか。

【産業政策課長】

製造業、化学工業で研究開発、技術開発、製造に携わる技術者を対象に開催したが、食品関係者が多い印象がある。この事業は、平成 28 年度から平成 30 年度まで 3 年にわたり取り組んだ。

【委員】

プロジェクト事業予算が増額になっている。項目としては変わっていないが、重点的に実施するところがあれば教えてほしい。

【産業政策課長】

平成 30 年度は決算ベース、令和元年度は当初予算ベースでの記載となっているため金額が異なっている。今年度予算について明確な拡大や縮小はない。

(3) 今後の普及活動について（資料 3-1、3-2、3-3、3-4、3-5）

【会長】

今年 1 月に D-プシコース（アルロース）の北米での製造開始が発表された。4 月には米国における栄養表示に係る指針が FDA から発表されるなど、今後の海外展開に関する大きな動きがあった。そこで、北米の状況について御報告いただくとともに、海外展開の進展が期待される中で、今後普及活動をどのようにしていくかということについて、日本での希少糖の認知度や各主体の取組みについて確認しながら議論したい。

【委員】

北米でのニュースリリースについて。メキシコでの工場建設は順調に進み、今年の秋頃から D-プシコース（アルロース）の製造を開始する予定である。プシコース（アルロース）をつくる酵素は夏頃に番の州工場から出荷できる予定である。FDA のプシコース（アルロース）を糖類から除外するという指針の発表後、アメリカからの問い合わせは以前の数倍になっており、アメリカ以外からも倍以上の問合せがある。日本でも販売することができるよう調整

しているところであり、今後、新しい展開になるよう期待している。

【会長】

メキシコの工場で生産される純品のD-プシコース（アルロース）は、まずは北米に提供される。その後、日本にも入ってくるのか。

【委員】

日本での販売は、生産酵素の認可やトクホ取得の状況を見ながらになる。酵素については今年3月に安全性の審査が終わり、規格を作っているところである。遅くとも1年以内には規格が出来上がり、その後日本で販売できるようになる。

【会長】

FDAの指針も大変意味のあることで、プシコースのカロリーが0.4kcal/gであるという正式な見解が出るとともに、炭水化物ではあるが糖類ではない、また、添加糖類にも分類されないとされたが、その意義を説明していただきたい。

【委員】

世界保健機関（WHO）が砂糖の摂取を半分にすべきという指針を出し、各国はソーダ税等で砂糖の摂取を規制している。D-プシコース（アルロース）が糖にあたらないということであれば、D-プシコース（アルロース）を使った商品の販売の後押しになると考えている。また、糖類除外の条件として、カロリーゼロと非う蝕性についても言及され、これも意義があることと受け止めている。

【会長】

パブリックコメント後に正式な決定となるが、恐らくこの指針がこのまま採用されると理解しているが。

【委員】

アメリカではパブコメが終わらないうちに認可と同じ状況になると認められるといわれている。

【会長】

この点については前回の国際希少糖学会でテーマとして挙げた。そういう活動の中からFDAにも働きかけがされたと聞いている。

【委員】

2016年に開催された第6回国際希少糖学会の「スペシャルプログラム」で希少糖の表記に関するディスカッションを行った。元FDAディレクターや、世界中の表記に関する専門家を

集め「希少糖はどうあるべきか」という議論をした。

北米、ヨーロッパ、アジアの代表的企業が各地域の現状を紹介した後、パネルディスカッションをした。国によってレギュレーションが異なり、統一指針を導くことはできなかったが、少なくともエネルギー源として扱われる「糖」とは違うカテゴリーであるべきだという統一見解になった。そのことについて何森学会長の名前で国際的なプレスをかけたことがきっかけとなり、ロビー活動が始まったと理解している。

【会長】

国際希少糖学会の活動からスタートしたということだ。希少糖の名称に「糖」がつくことから糖類に分類され砂糖と同じ扱いをされていたところ、学会から糖とは異なるという提言をした。今回こういう指針が出たことは、今後の事業化の追い風になるものである。

国内では、一昨年、希少糖普及協会が11月10日を「いい糖の日」として希少糖の日に制定し、その日を中心に県内外でのイベントを開催するなど、認知度の一層の向上に向けた取組みを精力的に行っている。また、県においても、国際見本市フーデックス ジャパンに出展する等、各主体が希少糖のブランド化や認知度の向上に取り組んでいるが、日本国内における希少糖の認知度は現在どのような状況か。

【産業政策課長】

県産品の認知度は隔年で調査しており、直近では今年3月に発表している。県内、関西圏、首都圏の3つのエリアでのデータである。希少糖/レアシュガースウィートの認知度は全体としては23.6%と、レアシュガースウィートが発売され、メディアに多く取り上げられた平成26年度と比較するとやや下がっているが、前回（平成28年度）と比較するとやや増加している。県内での認知度は8割だが関西圏・首都圏ではまだ伸びしろがあり、県においては引き続き、関西圏・首都圏でのPRに努める。

【委員】

11月10日を中心とした希少糖週間・月間にイベントを集中させて取り組んだ。希少糖月間では、県内と兵庫県、東京都を拠点にイベントを実施した。県内では菓子工業組合青年部との共催で、丸亀町グリーンを会場に「菓子まつり」を開催するとともに、当日及び前日に同会場とJR高松駅構内とで「希少糖ハイボールBAR」を開いて、皆様に親しんでいただいた。希少糖ハイボールは、ご当地ハイボールとして普及していく中で、希少糖の認知度向上を図ることに大きな役割を果たしたと考えている。希少糖ハイボールをメニュー化した県内の居酒屋は50店舗近くになり、全国では100店舗近くになった。昨年11月の月間は更に料理にも希少糖含有シロップを使ってもらおう活動を展開し、50店舗が参加して好評を得た。

兵庫県では、サンテレビと共同して神戸のハーバーランドで希少糖の日のイベント「いい糖だね！希少糖」を開催し、通行者の関心を引いた。東京では11月16日に女子栄養大学と共催でセミナー「糖尿病&肥満予防に向けて～食後高血糖のコントロールで日々を元気に過ご

すための食生活を学ぶ～」を開催し、定員 100 名のところ 200 名を超える応募があった。

希少糖普及協会では、今年もこの3つの拠点を中心にイベントを行いたいと考えている。また、資料3-5にイベント用ツールを掲載しているが、今年もツールを用いて希少糖の日・希少糖月間を盛り上げたい。去年は伏見製菓所の協力により丸亀市役所でノボリを掲げていただいた。また高松市の全コミュニティーセンターでも菓子まつりのチラシを置き、周知を図っていただいた。戦略会議委員の皆様にも御協力をお願いします。

【委員】

東京地区では消費者向け・業務用向けの展示会6つ（ファベックス、ふれあいクッキング、グルメ&ダイニングスタイルショー、ABCクッキング、ifia、ウェルネスフード・ジャパン）に出展した。サンテレビでは昨年5月から「レアシュガークッキング」を放映しており、サンテレビ関連で「うるる四国2019」での広告「希少糖ハイボールマップ」掲出、スイスホテル南海での「令和マンゴーゼリー」メニュー化、ローソンでの希少糖商品テレビPR（2回）などを行った。

また、三木町でキャンプを行った縁もある INAC 神戸レオネッサと来年1月まで希少糖サプライヤーの契約をし、チームとRSSとフジッコのカスピ海ヨーグルトがコラボレーションした動画を作成した。オンラインショップとレアスウィートのYouTubeで公開している。

健康都市を謳っている弊社所在地である伊丹市では、希少糖普及協会がセミナーを行っている。

【委員】

去年の菓子まつりでは、高校生による和菓子甲子園エントリー作品の販売が印象的だった。今年も高校生による菓子販売を計画しているか。

【委員】

今年のイベントについては現在協議中である。去年は、販売数が少なく、すぐに売り切れてしまったので、実施にあたってはそういったところを十分考慮したい。

【委員】

兵庫県の高校生とのコラボレーションはないか。

【委員】

伊丹市内には市立高校1校と県立高校1校がある。市立高校とは希少糖を使ったお菓子を作って販売したことがある。継続して行っていないが、検討したい。

伊丹市内にキャンパスがある大手前大学とは、伊丹市と一緒に市民向けに年2回のスイーツ講座を継続して実施している。

【委員】

菓子まつりでの高校生による販売は、できれば洋菓子協会も参加させていただきたい。(プシコース (アルロース) の純品が販売されることについては)、糖分を2分の1にすることは我々の業界では大変意味のあること。それができれば新しい市場ができ、和三盆と同じくらい普及していくと思う。

【会長】

プシコース (アルロース) 純品の販売開始や FDA による指針の公表など、明るいニュースが続いている。香川県をはじめ日本では「プシコース」の呼称が定着しつつあるが、「アルロース」という呼称が登場し、ニュースが出るが故に戸惑いや混乱が起きつつある。

プシコース (アルロース) を利用する方々の間で、困っていることや御意見はないか。

【委員】

今のところ、そういった話は出ていないが、どちらかに統一するという話があるのであれば、統一する方向に持って行っても良いのではないか。

【会長】

呼称については「プシコース」は英語読みすると「サイコース」になるため、英名は「アルロース」の方が良いだろうという議論があった。国際希少糖学会では、2014年のシンポジウムで一定の指針を出しているの御紹介いただきたい。

【委員】

国際希少糖学会事務局長の立場でお答えする。2014年のシンポジウムでこの問題を討議した。学会では、科学的にこの物質がどう呼ばれていたかという観点で調査・議論し、当初「アルロース」という名称でスタートしていたため、学術的には「アルロース」の呼称が相応しいのではないかという提言をした。それが国際的に広がる中で国外では「アルロース」と呼ばれているのが現状である。国内では既に「プシコース」の呼称が広まっていたので、国内では併用でいいのではという国際委員の判断があり、学術的には「アルロース」、国内的には「プシコース (アルロース)」と併用されている。

もう一つ論点がある。広辞苑第7版に希少糖が取り上げられ、詳細に記載される中で「プシコース」の名称が広辞苑の中に入っている。「酵素によりフルクトースから大量に合成され、他の希少糖の合成原料となる」と記述されている。個人的な見解としては併用を公の見解とし、商品化にあたってつけた名称が固定化していくなど社会の自然なチョイスに任せるのがよいのではと思う。

【委員】

シュガーといっても国によって砂糖を指したり、ブドウ糖を指したりする場合があるようだ。「ガラクトール」は「ズルシトール」ともいい、「グルコース」は「ブドウ糖」「デキス

トロース」ともいうように、糖には様々な名称が用いられているものがある。国際希少糖学会では科学的に検討し、アルロースを使用することが適当であると提言した。しかし、プシコースが定着している場合はその使用も認めるとしている。学問的にどう呼ぶのかは議論したとしても、一般的に糖の名称は使用していく中で決まっていくようだ。希少糖には多くの種類があるが、現在は「希少糖」といえば「レアシュガースウィート」を示す場合が多い。言葉は使用していく中で変化し、定着するものである。プシコースにするか、アルロースにするかを議論することはあまり意味がないことかもしれないと思う。

広辞苑に「プシコース」が載ったということは、日本では「プシコース」が定着しているということを示している。

【委員】

社内では「プシコース (アルロース)」と決めている。しかしながら、「ブドウ糖」に「グルコース」、「デキストロース」と様々な呼称があるというのを聞くと、例えば医薬用には「ブドウ糖」という名称で規定されているのであれば医療関係者はその名称を使う等、分野毎の名称で呼ばれても良いのではと思った。今後、「プシコース」の呼称が定められれば、消費者は「プシコース」の呼称を使っていくだろう。そういう意味では、併記していると、どちらを使えばいいのか、との混乱が生ずるかもしれない。どちらの呼称で呼んでも良い、というのは良い案であると思った。

【委員】

今の時点で商品として出回っていないので、学術的な名称が出回っているのが現状である。「プシコース」も「アルロース」も学術的な名称であり、「味の素」が、論文中では「グルタミン酸ソーダ」と表記されるのと同じことだ。

プシコースには過去に「さぬき新糖」、「レアスウィート」という名前を付けた。これから、商品としての名前を考えていく必要があると思う。希少糖の知名度は上がってきているが「プシコース」の名称は知られていないのではないかと。学術名とは切り離して、普及する上での名前を考える必要があると思う。

【委員】

今までの糖に共通して言えるのは、モノが単品として沢山あるものは和名がついているということである。スクロースがショ糖になり、ラクトースが乳糖になっている。ガラクトースに和名がないのは単独では存在しないからである。このように、(プシコース(アルロース)が)文化の中で国民に根付いたときに、最終的には国民による多数決で名前が決まるのではないかと。無理をしてどちらかに決めるのではない包容力が必要ではないかと思う。

【会長】

複数の名前が出てくると混乱が生じるおそれがあることから話題にした。どちらで呼ぶのかは学術的な観点からの捉え方、事業化という観点からの捉え方があるが、文化の中で自ず

と決まっていくものではないかとの議論をいただいた。

大切なのは、いずれも同じものであるということを混乱が生じないように正しく伝えていくことだ。普及協会としても様々に展開していく中で協調していただければと思う。

【委員】

普及協会としてはプシコース（アルロース）としているが、今後、アルロースの呼称が広がればアルロース（プシコース）としていくことも考える必要があるかもしれない。

【会長】

こういった戸惑が出てくるというのは、良い意味で移行期に入っているということだ。次の議題でも明るい話題を紹介する。

（4）新たな希少糖生産の状況について（資料4）

【会長】

県では、かがわ希少糖ホワイトバレープロジェクトの柱の1つ「希少糖産業の創出」のため、平成27年度から、新たな希少糖生産に関する事業に参画する県内企業を支援している。平成27年度から平成29年度まで、この制度を活用し、新たな希少糖の研究開発に取り組まれた株式会社伏見製薬所に報告してもらおう。

【委員】

弊社では糖の誘導体や複合糖質・糖鎖の研究開発を地域の共同研究として実施している。今から御紹介するのは、香川県の支援を受けて開発した新たな希少糖であり、医薬品・医薬部外品、化粧品といった付加価値の高い製品を目指して取り組んでおり、発売に向けて準備を進めている。お手元の資料4をご覧ください。

弊社で開発している希少糖メチル-L-ソルボシドを紹介する。この糖はインドや南アジアで広く栽培されている *Grewia asiatica* という植物の実（ファルサ）の中に多く含まれる。多くの希少糖を生産し、評価を行う中で、この糖が高い抗菌活性や保湿性を持っていることが分かった。

機能性については、抗菌活性、甘味度、保湿性について調べた。甘味は砂糖の70～76%である。保湿性はソルビトールよりは劣るが比較的高い保湿性がある。一番興味深いのは抗菌活性である。資料の真ん中あたりに病原菌の名称と性質を書いた表がある。一番右の欄にはメチルソルボシドが菌に対して抗菌活性を持っていれば○、持っていなければ×をつけている。約20種類の菌を調べたが、水虫菌、加齢臭菌、ニキビ菌に選択的に効くことが分かった。これまでは全ての菌に広く効くのが理想の抗菌剤であるといわれてきたが、最近菌を全て殺すのはかえって体に良くないといわれている。また、細菌叢を解析する技術が進み、大手化粧品メーカーを中心に、皮膚の細菌叢を解析して整えたいというニーズがあり、この糖はそのニーズに応え得ることが見出された。

現在、医薬部外品、化粧品市場で必要な安全性試験が終わり、関係する法規制への対応や

規格の制定に取り組んでいる。また、今年度は香川大学の国際希少糖研究教育機構の協力を得て、結晶の構造解析を始めている。上市目前のところまで来ることができ、これまで御支援をいただいた皆様にこの場を借りて御礼申し上げる。

【会長】

大変活発に活動され、事業化目前までできていることに敬意を表する。

【委員】

メチル-L-ソルボシドの生産ロットはどれくらいになるか。また、上市に向けての課題があれば教えてほしい。

【委員】

ようやく製法が固まり、再現性やロットにぶれがないかの確認を最優先でやっている。コスト低減に関わる改良には引き続き取り組んでいく。

商品化に向けての課題は、認知度の向上である。医薬品ではなく、一般消費者へ向けた加齢臭対策やニキビ対策としての医薬部外品としており、選択的抗菌性の考え方を一般消費者にどう浸透させるのか、国の推進するセルフメディケーションの考え方に添ったものではあるが、それをどう発信していくのが難しいので、その辺りの御協力をいただければと思っている。

(5) その他 (資料5)

【会長】

事前にいただいている議題「国際希少糖学会 2019」について御説明をお願いしたい。

【委員】

資料5をご覧いただきたい。12月3日火曜日から3日間、かがわ国際会議場で第7回国際希少糖学会を開催する。学会自体はアカデミックなものであるが、世界中から参加する出席者にとって有意義なディスカッションができ、出会いの場にもなるようなスペシャルプログラムを検討中である。皆様御参加いただきたい。

【会長】

市民向けイベントや高校生を対象としたものは企画しているのか。

【委員】

高等学校の先生から、生徒に国際的な会議に触れさせたいとの要望があり、高校生に無料で2階席から学会を見てもらう機会を提供することを考えている。

【会長】

前回、前々回は今日の会議で議論してきたようにシンポジウムからの発信があった。今回もシンポジウムからの発信や最新の研究の発表があると思われる。是非ご参加いただきたい。ここからは自由な意見交換や情報提供の時間にしたい。

【委員】

香川大学から追加の報告がある。

瀬戸内国際芸術祭の夏会期に、北浜アリーで太田泰友さん、岡薫さんが希少糖に関するアートを発表し、何森先生が監修にあたる。希少糖をモチーフとしたブックアートということで、本と音響と希少糖研究のイメージを組み合わせたアート作品に仕上げると聞いている。希少糖をアートの視点から見る新しい取組みであり、認知度の向上、希少糖の産業的展開につながればと考えており、大学として作品の製作・展示に全面的に協力する。時間があれば、会期中にお立ち寄りいただきたい。

【委員】

地域創生の一環として、強いシーズをもっており、ニーズがあるような他県の事業と交流ができないか。例えば、他地域との間で互いの県の素材の用途開発やマーケティングを行うといったバーターの関係の構築ができないか。自身は研究の他、つなぎの役割をする産総研ふるさとサポーターの香川県のサポーターになっている。時間はかかると思うが、地域の交流について議論していければ。

【委員】

地方創生は地域間競争でもあるが、地域単独ではできないこともある。それぞれの地域が地域資源を持ち寄り、協力しあうという視点は大事である。別の分野だが、四国全体の産業競争力の活性化を図るため、四国四県が連携した取組みをしている。そのように具体的に連携できる取組みがあれば御相談いただきたい。

【委員】

他県や他地域との連携策としては、地域に閉じないプラットフォームを立ち上げ、そこに他地域からも事業者などに参画してもらい、共同で研究開発や事業化支援を行うという方法が考えられる。個別の連携事例がどれだけあるか、希少糖が日本全国でどれほどの認知度や関心があるのか現状も認識しておく必要がある。これから地域外に広がりを持たせるためには、更に認知度を上げ、連携先を開拓していくことが大切だと思う。

【委員】

伏見製薬所の希少糖の基礎研究から商品化までの取組みには頭が下がる思いである。希少糖には多種多様な興味深い機能があり、機会があれば弊社も参画していきたい。

【委員】

洋菓子協会中四国ブロック協議会で希少糖の紹介をしたが、洋菓子業界は糖には大変興味があるところである。希少糖は、今でもある程度の認知度はあるが、今後（純品が）リリースされれば更に認知度が上がるのではないかと期待している。

【会長】

良いニュースもあり、今日は中身の濃い議論ができたと思う。これをもって、第7回希少糖戦略会議を終了する。委員の皆様には、長時間にわたり御議論いただき、感謝申し上げます。